



**SANZUI** vol.09\_2016 winter

特集





SANZUI vol.09\_2016 winter

## CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。  
実演芸術に触れた感動が水の流れるように  
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。  
そんな思いを込めました。

<http://www.cpra.jp/sanzui/>

(バックナンバーの閲覧・プレゼントの応募はこちらから)

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会  
実演家著作隣接権センター(芸団協CPRA)

## 02-11 特集 笑い

春風亭昇太

はるな愛

塚地武雅

が〜まるちょぼ / 伊藤千枝

玉川奈々福 / ポカスカジャン

## 12-13 美匠熟考

二十五絃箏

二代目林家正楽の狭

14-15 カンゲキのススメ「歌舞伎」

16-17 裏舞台という名の表舞台  
「フードスタイリスト」飯島奈美

18 実演家ゴヨータシ

19 ひとことください / 寺田心

20 若き実演家の未来 / 井上 銘

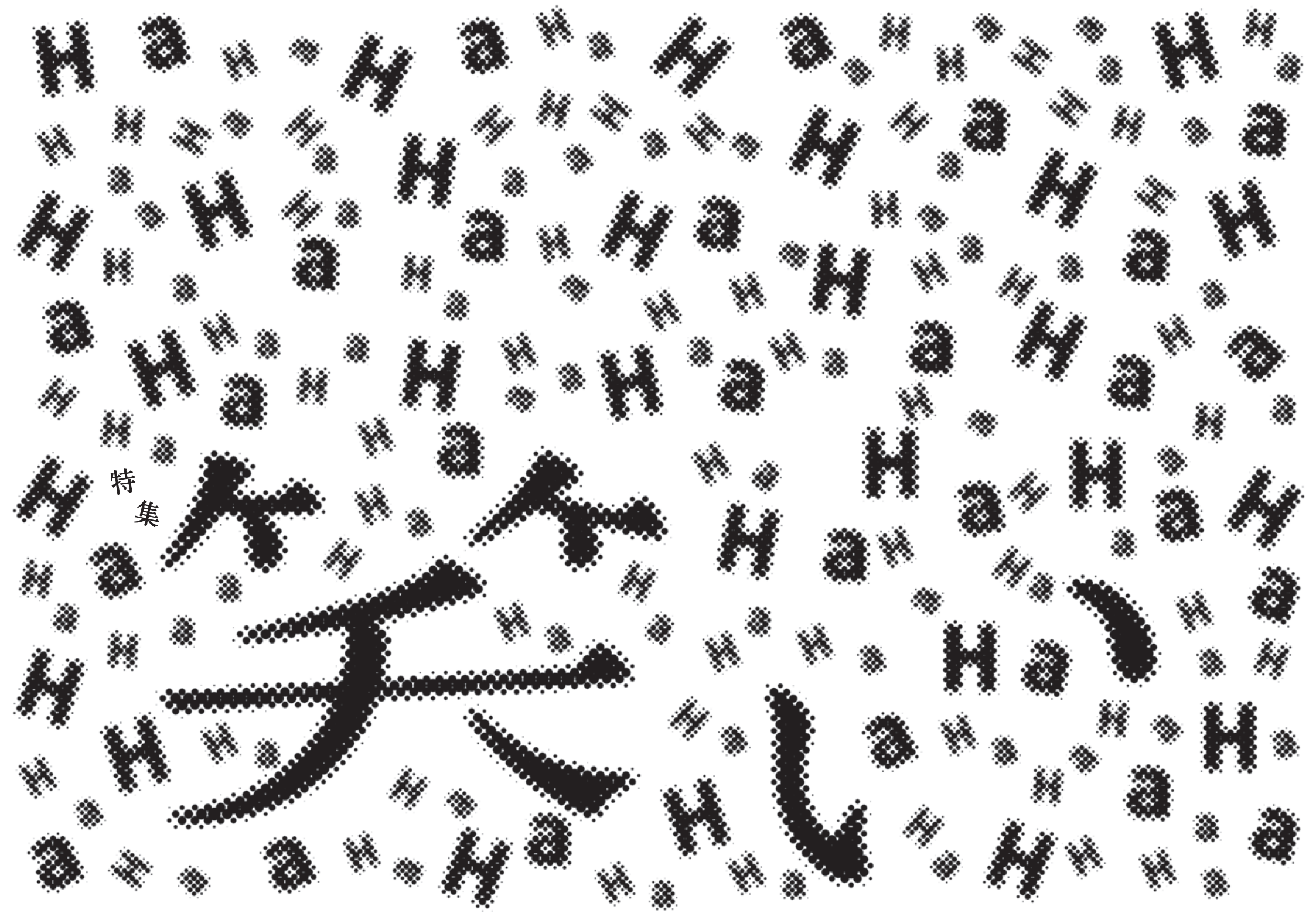
21 SANZUI ぼっしょん  
海城中学高等学校 古典芸能部

22 エッセイ  
ピーター・バラカン

24-29 ロングインタビュー

# 室井 滋

特集





特集

## 笑いは、人生を幸福にする。

笑いは、ストレスを和らげる。

笑いは、脳の働きを元気にする。

笑いは、人を美しくする。

笑いは、まわりの人に伝染し、

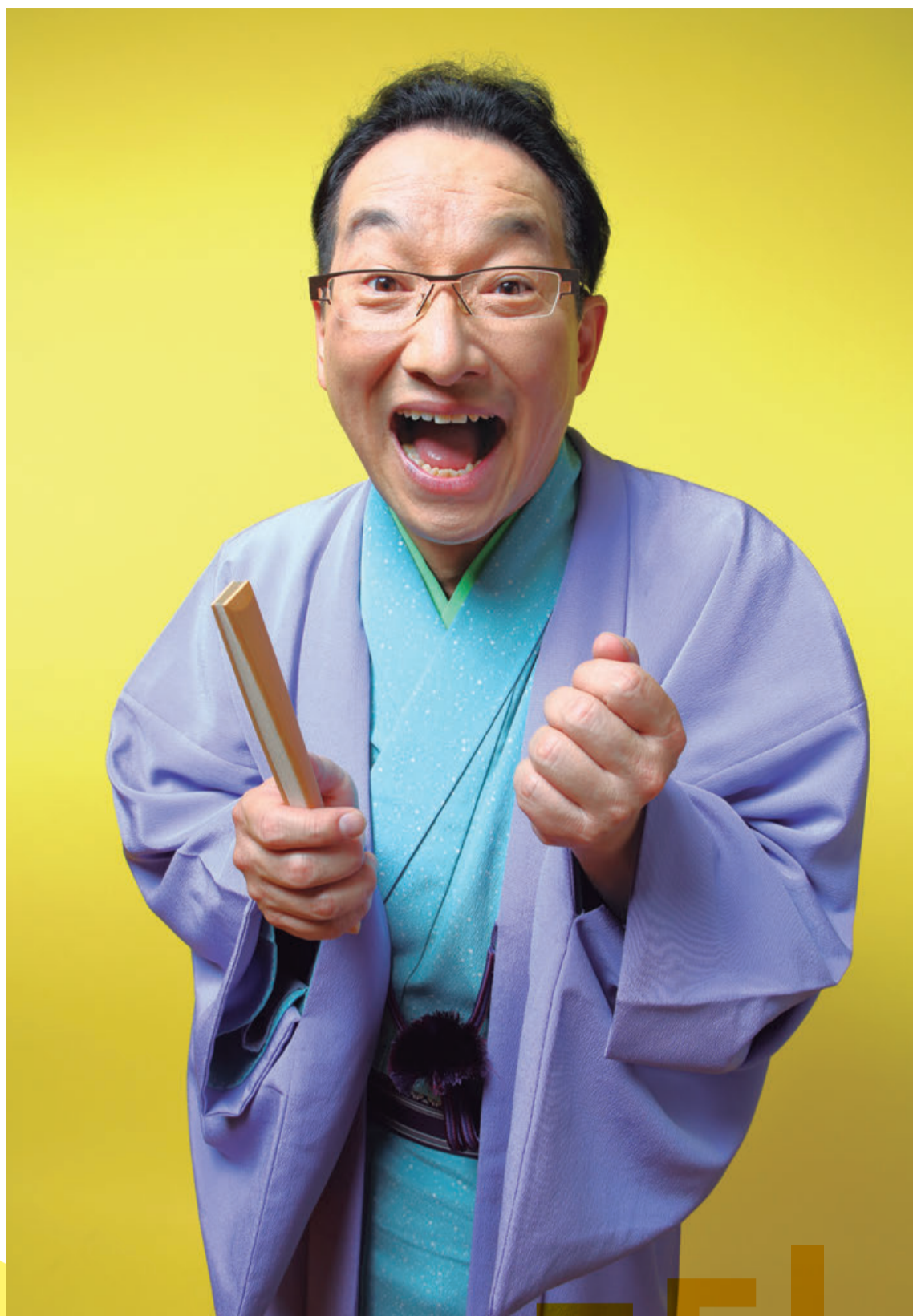
コミュニケーションを円滑にする。

つまり、笑いは、たくさんの人の人生を幸福にしている。

そんな笑いを創り出す人とは、一体どんな人なのか？

ただ人を笑わせるために、人知れず芸を磨き、日々鍛錬を続ける、

その人たち自身も、とても素敵な笑顔をしていた。



# SHUNPUTEI SHOTARO

## 春風亭昇太

### ストレス解消法はうけること！

テレビ番組『笑点』でもお馴染みの春風亭昇太さん。寄席での一席は主に創作落語。現代の言葉で、時代にこだわらないストーリーを展開する。

10代のころは演劇やコントに憧れていたという。「大学に入って初めて観に行った落語がすごく面白くて、それから。演劇は、人と絡むことが多いから、僕には向かないと思った。落語は一人で行ける。やってダメなら僕のせいとあきらめもつく。自分で演出できるのが、落語の最大の魅力」。

当時は漫才ブーム。マスコミにも、落語家は時代遅れの笑いをやっていると思われる。そんな中、寄席でタブーとされていたメガネを貫き、高座(舞台)で寝ころがるようなことも。「これが落語？」と思いつつも爆笑を誘う。型破りな演出にとまどう落語ファンもいたものの、プロの落語家からは応援された。「落語家は落語が完成していると考えたらダメだ」と思う。僕が落語を演出するとしたらこうなります、というのが今やっていること。伝統芸だけど、

伝承芸じゃない。個々の考えをより強く出さないと」。

もちろん、初めてのネタは特に考えるし、悩むし、ストレスがたまる。でも、落語家の最大のストレス解消法はうけるということ。「落語をやる難しさと同時に、うけるという楽しさが待っているからできる。独演会やトリのとき、幕が下りて拍手が止まない中、幕の向こう側で『あ～面白かった！』という声が聞こえてくると幸せ」。笑いはストレスをもみほぐしてくれる、脳へのマッサージ。「大変

な時期に、人は笑いたいと思う。それは、震災のときに感じた。個々のお客さんが求めている笑いがあるから、その選択肢の中に春風亭昇太がいるといいな、と思う」。

映画や人が楽しむモノの値段を見るたびに、落語がもっと面白いかと考える。「いつも懸命にやることを心がけている。絶対に最後まであきらめない、やりきる！今日のお客さんに楽しんでもらうことだけを考えてやっています」。今やれる精一杯、だからこそいつも目が離せない。

PROFILE 1959年、静岡県生まれ。1982年春風亭柳昇に入門。1986年二ツ目、春風亭昇太となる。1992年真打ち昇進。新作落語の創作活動に加え、現代的な解釈で落語に取り組む。演劇や音楽などジャンルを越えた公演でも幅広く活躍。落語の書籍、CD、DVDの他、著書に「城あるきのススメ」。第55回文化庁芸術祭(演芸部門)大賞受賞。



# HARUNA AOI

## はるな 愛

すべてが楽しめる人生、  
悩んだからこそ今がある

どこで出会っても、明るい笑顔がたえない、はるな愛さん。「テレビでたくさんの人に笑ってもらいたい」。そう思うのも、男の子に生まれながら、性に違和感を感じていた子どものとき、テレビのハコの中の芸能界に夢を見たから。「いやなことをすべて忘れさせてくれるハコだった。私は今、そこに入ってるから、笑顔でいることが大切だと思う。小さいときにアイドルを走って観に行った記憶が強く残ってる。だから、街で呼ばれたら、笑顔で一緒に写真を撮りたくなるんです」。

今では、憧れだったアイドルそのものになりきる“エアークイーン”も人気のひとつ。「けっこう喉を使うんですよ。このときの声はこう

いう表情だ、ビヨンセならこういう唇の形とか。上辺だけではできない。その人に近づけようとやってたら、気持ちまでその人になっちゃうんです」。どんなに疲れていても、本人がやっている気持ちにそのまま引張られる。そんな繰り返しも、キラキラしたエネルギーのモトになっているようだ。

「女の子になりたい、自分らしく生きてみたい」と親に告白したのは15歳のとき。それまでグレーだった世界が一気に色づいた。もちろん、親や周囲との間に悩みは尽きなかった。「悩んだから今がある。ここでめっちゃ考えたら、すぐに次にはハッピーなことが来るのがわかっているから、すべてが楽しめるという人生になれた」。

可愛いファッションは、“女の子”への憧れが強かった幼稚園や小学校のときの気持ちからきている。「普通は親に服をチョイスしてもらって、家のカラーがあって、そこからはみ出すと私らしくない、と思ってしまう。でも、いきなり女の子になれるチャンスが来たから、なんでも試せる」。嬉しかったのは、テレビの仕事で自身の存在が、性の問題で悩んでいる子どもに、家族や社会に向かう勇気を与えたことを知ったとき。「人は、みんな変われる。いつでも、年齢も関係ない。周りの人のために生きる人生じゃなく、自分のために生きる人生を選んだら、勇気も出る」。とっておきの笑顔に、力強い言葉が響いた。

# 塚地 武雅

笑いがすべて、仕事で恩返ししています

# TsUKAJI



# MUGA

お笑いコンビ・ドラゴンドラゴンの塚地武雅さん、近年では俳優としても活躍の幅を広げている。「子どものころから人を笑わせることで、友達とのバランスがとれたり、居場所があったような気がする」。中学のときからお笑いの道に行きたいと思っていた。大学卒業後、一度就職するも辞表を出す。「父親は怒り狂い、母親も泣き崩れた。食えなくても誰に反対されようが、やるしかないと思った」。事務所の養成所で相方(鈴木拓)と出会い、コンビでのネタづくりが始まった。「モノマネが得意だったから、キャラクターが面白いコントをやってみた。僕の言動をずっとみてクスクス笑っているのを肌で感じて、すごく嬉しかった」。

いまや、街でその姿をみかけただけで「うける！」と笑う子ども(笑)。ある程度バックボーンこしらを拵えることで、キャラを通した表現ができるようになったのは財産。バラエティ番組でのコントの評判から俳優のオファーも来た。「お笑いとして培ったものがベースにあって、両方やらせてもらっているのはありがたい」。コンビでは作演出をし、相方に間も細かく指示する監督のような立場だが、「芝居の現場では、監督がああしたい、こうしたい、と言ったらそれが正解だと思って従う。期待に添えるかどうかだけ」。笑うことは人の安心する感情だと言う。「『悲しい』はすべての人に共通するけど、『笑う』ことは

バラバラ。全員ツボが違うのが面白い。災害や戦争のとき、一番いらんような仕事だけど、一番いるような仕事だと思う。好きなだけなんですけど、やりがいを感じてる」と、はにかむ。子どものころ、お笑いをみて幸せだった、それを今、仕事として返している気持ち。「イカ大王の着ぐるみも昔なら見た目じゃなくネタで勝負!と受け入れられなかったと思う。今は、子どもたちが目を輝かして見てくれるのが嬉しい」。「夢は、ただただ笑える、長い尺の喜劇の映画やドラマをつくること。一番の理想は、自分でやりたい。自分の面白い間は自分がわかる。常に厳しく自らの表現と向き合って、笑いを追求し続けている」。

PROFILE 1971年大阪府生まれ。1995年に芸人養成のスクールJCAに入り、ドラゴンドラゴン結成。バラエティ番組『はねのトビら』出演以降、俳優としても映画、ドラマで活躍。『間宮兄弟』(2006年)では、キネマ旬報、ブルーリボン賞、毎日映画コンクールの新人賞を受賞。NHK『LIFE! ~人生に捧げるコント~』では、イカ大王のキャラクターで人気を呼んでいる。CD「イカ大王体操第2」を発売中。

# が～まるちょば

言葉を使わずに、笑いを届ける

「が～まるちょば」とは、ジョージア語で「こんにちは」の意味。「サイレントコメディー」、文字通り言葉を使わずに笑いを届けるHIRO-PONとケッチ!の二人組だ。「舞台上に違う世界を作り上げ、お客さんの頭の中で言葉を想像できるように、僕らが仕向けるんですよ」(H)。言葉を使わずに、お客さんの想像を膨らませることによって「笑い」が生まれる。

が～まるちょばは、海外での活動も多く、高い評価を受けている。日本と海外とで「笑い」の違いはあるのだろうか。「基本的には同じかもしれませんが。言葉を使わないため、言語を超えた人間の普遍的な『笑い』だと思います」(ケ)。ただ、お客さんの「笑い」に対するリアクションが違うという。「日本では、面白いと思っていても、周りを気にしてか、リアクションが小さい。海外だと、周りに関係なく、自分が面白いと思ったこと

は、大いに笑う。リアクションが大きいですね」(H)。

忘れられないステージが、2007年、神奈川県立青少年センターでの公演だ。それまで、自分たちの表現が伝わる限界と考えていた客席数400名程度の公演に留めていた。自分たちの表現に限界を作らないために、倍の客席数での公演を初めて行った。「海外では評価いただいていたのですが、日本では、無理なのかなんて思っていました。でも、ステージが終わるとスタンディングオベーション。日本でも受け入れられたんだと感じて、舞台上で泣きましたね」(H)。

二人にとって「笑い」とは。「余裕かも。日常に『笑い』がある方がいいですね」(ケ)。「誰かと一緒なら、『笑い』のある人生がいい。笑ってくれる人がいるから、自分のために演じる。もし、無人島に一人なら、演じることもないでしょうね」(H)。

# GAMARJOBAT



PROFILE 上からケッチ!とHIRO-PONのサイレントコメディー・デュオ。1999年結成。エジンバラ・フェスティバル・フリンジやブライトン・フェスティバル・フリンジでの受賞など言葉や文化を超えたパフォーマンスが、高く評価されている。2007年には、Newsweek日本版「世界が尊敬する日本人100」に選出。2014年からは6人組ユニット「ザ・が～まるちょばカンパニー」でも活動している。

# CHIE

## 伊藤千枝 (珍しいキノコ舞踊団)

人とふれあい、自然と笑顔に



PROFILE 1990年、日本大学芸術学部在学中に珍しいキノコ舞踊団を結成。演出・振付・構成を担当し、作品発表を行うほか、映画『めがね』(2007年)、CM「アセロラ体操」(2010年)、miwaをはじめJ-POP楽曲への振付や出演など幅広く活躍。

「珍しいキノコ舞踊団」を主宰する振付家の伊藤千枝さん。子どものころから踊りが好きで、大学で出会った仲間と念願のダンスの団体をつくった。コミカルな振りで独特な世界観を表現する舞台作品は、メンバーと手探りでつくられる。「パズルのピースを探すように、何でもいからやってみる。つくっていく中で、自然と笑顔になるようなことが出てくることが多い。顔がぱっとはじけるというか、そうなるといいなと思いながら作品つくったり、踊ったり」。

伊藤さんの思うダンスとは、「自分の中から、感情から生まれてくる動き」。「カッコいい」舞台を目指しているけど、「クール」ではない。はずしたところにある面白さを求めるのは、昔みていたドリフターズやアニメの影響もあると思う。いつも念頭にあるのは、お客さんに笑顔になってほしい、みんなと一緒に踊りたいということ。

その思いから、子どもや親子、さまざまな年代とのワークショップも、人と人がふれあうことがテーマだ。さすったり、背負ったり、トンネルをつくって通り抜けるゲームをしたり、気がついたら身体を動かしている。必死になって動いているうちに、自分の身体に気づいたり、人の重さを感じたり、汗びっしょり。ダンスでは、表現するものが自分の身体しかない。「『ダンス楽しいでしょ』、もあるけど、『人間讃歌』。『人ってすごいでしょ、素晴らしいでしょ人間って』、ていうことを最終的に伝えたい」。

学校でのワークショップでは、大人しい子が積極的に動き出して先生に驚かれることもある。「今の社会では、人目が気になる。ワークショップでは、そういうことが気にならない時間をつくりたい」。縮こまらない、身体と心がつながる表現から、笑顔が生まれる。

# 玉川奈々福

## 泣きもあれば笑いもある、感情に訴えるのが浪曲

20年前、三味線の音色に惹かれて浪曲の世界に足を踏み入れた。「浪曲の三味線は音の出し方が自在。効果音や“うっ”という人の感情なんかも描けます。いくら弾いても飽きません」。軽い気持ちではじめたが、音色の先にある浪曲の核心がなかなか掴めなかった。師匠に促され、節をうなったことでさらに深みにはまった。「節をうなって、はじめて芸の自在さを感じました。浪曲師と曲師の裁量がすごく大きい。だからセッションがうまくいったときの快感は<sup>たと</sup>えようありません」。

近年では他ジャンルとのコラボレーションも多い。「例えば格式の違うお能でも、身体と身体で息が合う共通性に気づいて、お能の語りの間に三味線を入れられた。譜面がなくて人の息を盗む浪曲の三味線ならでは」。芸能の特徴を探ることで世界が広がっている。

浪曲といえば浪花節。浪花節は

お涙頂戴の代名詞だが、笑える話も多いという。「昔は寄席でも浪曲が入っていて、その多くが粋な笑いでした。いまあまり知られていないのは残念。泣きもあれば笑いもある。感情に訴える浪曲は、その振幅が大きい。『次郎長伝』や『左甚五郎伝』などネタそのものが笑えるものがいっぱいある」。

笑いが好きだった師匠から受け継いだ演題の他に、新作にも取り組む。「自分がいいなと思う価値観を込めたい。原作に惚れ込んで浪曲にしたり、お涙頂戴の先入観を覆したいと『浪曲シンデレラ』という爆笑の作品をつくったり。緊張を強いられる世の中だから、客席で物語に心浸しているときだけは、油断してほしい。身体緩めてほけてほしい」。

舞台は生き物。お客様とつくる空間を毎回楽しみに、舞台やワークショップなど、独自の企画が生まれている。

# TAMAGAWA NANAFUKU



PROFILE 1994年日本浪曲協会主宰の浪曲三味線教室に参加。翌年玉川福太郎門下に曲師として入門。2001年より浪曲師としても修行を重ね、浪曲師と曲師の両方で活動。2006年に芸名を玉川奈々福に改める。浪曲イベントのプロデュース・出演に加え、テレビ、インターネットラジオなどでも幅広く浪曲の魅力を伝えている。



# ポカスカジャン

## なんでもあり、笑いでロックを貫く!

音楽を思いっきり楽しんで、お客さんに笑ってもらおう! コミックバンド「ポカスカジャン」は、フジロックなど人気バンドが出演するロックフェスも、笑いで盛り上げる。メンバーそれぞれがバンドボーカル出身で抜群の演奏にのせたネタが売りだ。

音楽からなぜお笑いに? 「30歳を前にワハハ本舗の舞台をみて『なんでもありの舞台、これこそロックだ!』と衝撃を受けた。バンドをやめて、ワハハの社長に入れてほしいと頼み込んだんです。花やしきで開催したワハハのショーからのスタートでした」(O)。

デビューの条件は、3人の音楽ユニット。花やしきで出会った歌のうまい省吾と、後輩のタマ伸也を引き入れ、ネタづくりがはじまった。曲はできてもネタはできない。さんざん悩んで、社長に「『笑ってなんですか? 弱いものいじめですか?』って。ある意味そうで、人

と人との関係性や立場が作用して笑いになることもある。そのさじ加減は実践で学んだ」(S)。

結成から半年で2時間の単独ライブに恵まれた。「音楽があったからこそできた。爆笑もとりたけれど、演奏して楽しい! それに僕らの強み」(T)。一方、生の舞台の怖さも。「スベるとすぐにわかる。ただ、それを越えてネタのエピソードになるのも不思議」(O)。

今年20周年。これまでやってこれたのも、「仕事」の枠を超え、笑ってもらうことの楽しさを味わえたから。「忘れられない本番は、震災後の気仙沼のライブ。揺れるような笑いが起きて、まさにゾーンに入った感じ」(T)。そんなスーパーライブに向かって常に全力投球だ。「目指すはクレイジーキャッツ。個々が強くなるとグループも強くなる。それぞれ新しいことにも挑戦して、芸を磨いていきたい。楽しい笑いで日本を明るくしたい!」(O)

# POCASCAJAN

PROFILE コミックバンド。メンバーは左から省吾、大久保ノブオ、タマ伸也。1996年に結成。寄席演芸場から大ホール、野外フェスまで音曲ネタで会場をわかせた。アイス「ガリガリ君」CMソング、Eテレ「みんなのうた」など楽曲提供。2014年度、国立演芸場花形演芸大賞・大賞受賞。

谷垣内和子  
 (日本音楽研究者)  
 Tanigaito Kazuko

## 二十五絃箏

日本を代表する楽器「コト」。「こゑいと」が語源だという説がある。祈りの声を絃に託す姿を表したものでしょうか。古来、さまざまな「コト」が存在し、伝統音楽では十三絃の箏が活躍する。

翻って現代の「コト」。二十五絃箏は、箏演奏家の野坂恵子の探求心から生まれた。しっかりと地を捉える二本の足。二十五個の眼が煌く。真っ直ぐに伸びる絃に整然と並ぶ琴柱ことじ。音が奏でられる一瞬を待ち構える。

箏は一つの音の響きが「命」。一音を充実した深い音に響かせ、もっと自由に表現したい。それには二十五本の絃が必要だったと野坂は言う。作曲家や音響学者、楽器製作者等、さまざまなプロの力を結集し、1991年に完成した。全長約180cm。長さだけならば、通常の箏と変わらない。しかし、現代の「コト」は新たな創作活動の原動力となり、箏曲の世界を拡大し続けている。



Number:017

Koto

林家二楽 (紙切り師)  
 Hayashiya Niraku

## 二代目林家正楽の鋏

「鋏は嘘をつかない。お前が苦勞した分だけうまくなる」。何でもそうでしょうが、入門後は、必死で稽古をしました。手には必然的にタコができる。これがグリップになって、鋏の位置の目安になるんです。生前父は私ほど大きなタコはなかったので、うまい力加減になっていたのかもしれませんが。

「紙切り」はリクエストをいただいて、切るプロセスも楽しんでもらいます。時事的なお題もどう切るか。自分が知らないものは、生みの苦しみも見てもらって評価してもらおう。「紙切りは、なんでも受け止めるべきだ」というのが父のポリシーでした。トリの師匠方がアクシデントで遅れたら、その前の紙切りで間をつながないといけない。父は春日部訛りから落語家をあきらめたけど、そのぶん話芸も評判がよかった。名人と言われても、お客さんに芸を楽しんでもらいたい、その一心でした。



協力：一般社団法人落語協会

Number:018

Scissors





新しいことにチャレンジしたくなる年の初め。歌舞伎に出かけてみませんか？ 歌舞伎の公演は通常昼の部、夜の部の二部制で、多くはタイプの違い3~4演目のハイライトを組み合わせで上演します。公演時間は休憩を含め4~5時間くらい。幕間にはお弁当を食べたりお土産を見たり、半日遊べるエンターテインメントです。公演はほぼ一年中行われていますが、おすすめは1月！ 晴れ着姿のお客さんも多く、劇場全体がうきうきする空気でいっぱいです。特別な服装や持ち物はありません。気軽にデビューしちゃいましょう。

## まずはお試し、「一幕見」！

「まずはちょっとだけ観てみたい」「料金がなくてハードルが高い……」というあなた。歌舞伎座、大阪松竹座、博多座などには、「一幕見席」という好きな演目だけを観られるチケットがあります。お値段は500~2000円ととってもお手頃！ 購入は当日劇場窓口のみ。発売時刻や料金は公演初日に発表されるので、「歌舞伎美人」サイト(<http://www.kabuki-bito.jp/>)の「ニュース」をチェックしましょう。ちょっと並びますが、それだけの価値はありますよ。

## 「化粧」で性格や年齢がわかる

歌舞伎の「隈取」は、血管や筋肉をデフォルメしたもの。身分や性格を示しています。赤い隈は若さや正義、強さを表現。藍色の隈はスケールの大きな悪役や怨霊などに使われます。女方の化粧にも、役柄を表現する様々な工夫が。口紅や目を囲む「目はり」は若い役ほど赤く、年を取った役ほど茶色を混ぜて黒っぽくします。お姫さまや身分の高い遊女・花魁は、肌の白さを強調するために白粉を二度

三度と重ねますが、老人の場合は肌色が透けるくらい薄塗りです。会場によっては有料でオペラグラスも借りられるので、顔を見比べてみるのも一興です。



## 隠れた名脇役、大太鼓

歌舞伎の伴奏はすべて生演奏。舞台上に見えている浄瑠璃や三味線だけでなく、効果音も舞台に向かって左側、下手にある黒い塀の向こうで演奏されています。中でも天候や自然の情景を表すのに活躍しているのが大太鼓。雨や風、川の流れる音まで、細長いばちで打ち分けます。雪の場面では、「どーん、どーん」と先を布や綿で包んだばちで柔らかく叩きます。実際雪が降るときに音はしませんが、雪の日の静けさが伝わってくるよう。テレビでも耳にする、幽霊が現れるときの「ドドロロ……」という効果音も大太鼓です。客席から姿は見えませんが、物語を盛り上げる隠れた名脇役にも、ご注目ならぬご注目！



## 700円で大違い！ イヤホンガイドで歌舞伎通に

初心者の方に全力でおすすめしたいのが、あらすじや見どころ、役者の紹介をしてくれるイヤホンガイド。観劇の邪魔をしない絶妙なタイミングで、解説が入ります。時代背景や仕草の意味がわかると、楽しさも倍増。借り際には使用料700円と保証金を合わせた額を支払いますが、保証金はあとで戻ってきます。観終わった頃には、あなたも歌舞伎通！

### 公演案内(2016年1月~4月) 東京では一年中ほぼいつでも観られます！

- 東京・歌舞伎座 1/2~26 壽初春大歌舞伎、2/2~26 二月大歌舞伎、3月 三月大歌舞伎
  - ・新橋演舞場 1/3~24 初春花形歌舞伎
  - ・浅草公会堂 1/2~26 新春浅草歌舞伎
  - ・国立劇場 1/3~27 初春歌舞伎公演

- 大阪・大阪松竹座 1/2~26 壽初春大歌舞伎、3/1~25 スーパー歌舞伎IIワンピース
- 福岡・博多座 2/4~21 坂東玉三郎特別舞踊公演、4/2~26 スーパー歌舞伎IIワンピース
- 香川・旧金毘羅大芝居・金丸座 4/9~24 四国こんびら歌舞伎大芝居

\*そのほか、京都四條南座でも定期的に歌舞伎公演が行われています。夏や秋には全国各地の劇場やホールを回る巡業も。

# 裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。  
主役のまわりに視線を転じてみると、  
至る所にプロの技が輝いている。  
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 12

## フード スタイリスト

food stylist

飯島奈美

Iijima Nami



Photo / Ko Hosokawa Text / Taisuke Shimanuki

フィンランドに小さな食堂を開く日本人女性を主人公にした『かもめ食堂』のスマッシュヒット以降、「料理映画」「料理ドラマ」というジャンルが確立したように思う。そこでの主役はもちろん俳優たちだが、ドラマを彩りつつ視聴者の食欲をそそる料理も同等の存在感を放つ。深夜に放送される料理ドラマに刺激されて、カロリー摂取量にシビアな紳士淑女をコンビニやラーメン屋

に走らせたりするのも、よく聞く笑い話だ。『深夜食堂』『ごちそうさん』『南極料理人』などの料理を担当した飯島奈美さんは、フードスタイリストのトップランナー。最初に挙げた『かもめ食堂』も彼女の参加作品で、とんかつや焼鮭の丁寧な佇まいが記憶に残っている人は少なくないだろう。けれども、本人はこう言う。

「『飯島さんのつくる料理、おいしそうでした!』と言われると、私ってまだまだだなあ、と思うんです。私たちの仕事は、監督やプランナーのイメージする料理を代わりにつくること。あくまで裏方であって、料理する人の存在がお客さんからは見えちゃいけません」。

フードスタイリストの仕事は、こんな風に進む。例えば映画作品の場合、まず監督から作品の世界観を聞く。時代設定や登場人物の性格や職業から、食環境を想像する。料理だけでなく、盛りつける皿を用意するのも仕事のうちなので、作品に合った食器を探すこともある。昭和の日本が舞台だったりすると、方々のリサイクルショップを訪ねるといふ。「福山雅治さんが主演した『そして父になる』では、一流企業のサラリーマン家庭と、町の電気屋さんの家庭が登場します。それぞれの家庭での『子どもが嬉しいごちそう』とオーダーされて私が

イメージしたのは、前者がすき焼き、後者は山盛りの餃子。それから電気屋のお母さんはお弁当屋さんのパートで忙しいから、横着してポテトサラダはバックのまま食卓に並べるかもしれない。スタイリストが今つくりたいもの、食べたいと思うものを出すのではなく、作品内にリアリティーを生む料理のあり方を考えるんです」。おいしそうなもの、美しいものを出すことが必ずしも正解ではない。これは、料理研究家や料理人とフードスタイリストの仕事の大きな違いだろう。

そんな飯島さんがこの仕事を選んだ理由は？「これといって得意なことのない子どもで、まわりから褒められたのは料理くらいだったんです。長く続けられる仕事を選びたかったから、数少ない取り柄のある仕事を選んで今に至る、って感じですね。でも昔から飽きっぽい性格なんです」とも謙遜するが、料理にかけるストイックさは並外れたものだ。いちばんよいタイミングで料理をカメラに収めるために、肉本体だけでなく、熱した鉄板の温度も測り「原因と結果」を研究する。飽きっぽいなんてとんでもない。ほとんど科学者だ。「どうやったら上手に料理できるかを考えるとキリがなくて、日々の蓄積が大切です。一方で、今までしてこなかったやり方に挑戦する探

究心も大事。肉じゃが＝甘い味というのが定番ですけど、砂糖を控えて醤油を塩にしてみると、また一風変わった肉じゃがができてきます」。

取材に応じることも稀なくらい多忙な飯島さんだが、ささやかな夢がある。「今の事務所はマンションの一室なんですけど、調理もできる店舗を借りられたら予約制のお店をやってみたい、なんて想像したりもします。と言っても、知っている人だけ予約できる、個人的なお店ですけどね。やっぱりつくったものを食べて喜んでもらえるのは何にも代え難い喜びですから」。料理は愛情。飯島さんの話を聞いていると、この月並みな表現に意識が戻ってくる。ちなみに今回の撮影のためにカットした大量の紫キャベツはパクチーと一緒にからめてサラダにするそう。「キャベツは春が季節ですけど、冬は冬でしっかりした味が楽しいんですよ」。残さず食べるのも料理への愛情。それでは、いただきます!

PROFILE 飯島奈美(いじま・なみ)  
東京生まれ。フードスタイリスト。TVCなど、広告を中心に活動。2005年に荻上直子監督作『かもめ食堂』参加をきっかけに、映画やテレビドラマのフードスタイリングも手がけるようになる。13年にはNHK連続テレビ小説『ごちそうさん』のフードスタイリングを担当。主な著書に『LIFE なんでもない日、おめでとう!のごはん。』(東京糸井重里事務所)、『シネマ食堂』(朝日新聞出版)、『飯島風』(マガジンハウス)など。



**Chocolatier Erica**

東京都港区白金台4-6-43  
電話: 03-3473-1656

小分けにならているので配りやすい。差し入れに最適ミルクチョコレート。

2階には、ラッピング雑貨を扱う「OGGETTI」がある。1階のチョコレートのラッピングを自分で選ぶこともできる。

ミルクチョコレートの中にマシュマロとクレープが入っている。食感が楽しい。

一番人気商品

白とピンクのグリーンを基調とした、爽やかな店内。おもわず声に出してしまふほど、かわいいディスプレイが飾られている。季節ごとに、店員さんが変えているそう。商品のラッピングもかわいいのだ。

俳優さんなども差し入れにしているそう。オリジナルのラッピングも人気。他の人とはちょっと差をつけた時におススメ。チョコレートは、店舗に併設されている工場です。毎日作るこだわり。チョコレート専門店だけに、溶けてしまう夏場はお休みのようなので、注意を。

スライスロワイヤル / トリュフ / エリカ / アンダレズ / ラム酒チョコレートココアパウダーで包んでいる。 / プランデーに漬けたチョコレートをココアでコーティング。 / 紅茶の香りがするトリュフ。

「楽屋」という名の通り末廣亭と喫茶楽屋は、つながっている。寄席の太鼓が開こうてくる店内。静かで落ち着いた昔ながらの喫茶店。常連は、喫茶さん。近くのアパートにお勤めの社員さんだ。

新宿三丁目、休憩する店を探すのに、いつも苦労する。そんな時、ぜひ思い出してほしい、穴場のお店。店内は、落語にゆかりのある、貴重な品物が飾られている。喫茶・落語ファンにとって聖地であり、あこがれの喫茶店なのだ。

浅草の職人さんが作っている銅のカップ。

うどん・そばは、お店で出汁とってます。

おもち2コ。ちくわ・あげ玉・のり・ねぎが入った、カウうどん。創業当時と変わらないそう。1本で、お腹いっぱいになった。

アイスコーヒー

**喫茶楽屋**

昭和三十三年創業

東京都新宿区新宿3-6-4 2階  
電話: 03-3351-4924

カウンターの側面は皿を使用。店内はほとんど創業当時と変わらない。

三代目 ケイさん  
末廣亭の歴史や喫茶さんのお話を丁寧に教えていただきました。

「楽屋」という名の通り末廣亭と喫茶楽屋は、つながっている。寄席の太鼓が開こうてくる店内。静かで落ち着いた昔ながらの喫茶店。常連は、喫茶さん。近くのアパートにお勤めの社員さんだ。

新宿三丁目、休憩する店を探すのに、いつも苦労する。そんな時、ぜひ思い出してほしい、穴場のお店。店内は、落語にゆかりのある、貴重な品物が飾られている。喫茶・落語ファンにとって聖地であり、あこがれの喫茶店なのだ。

浅草の職人さんが作っている銅のカップ。

うどん・そばは、お店で出汁とってます。

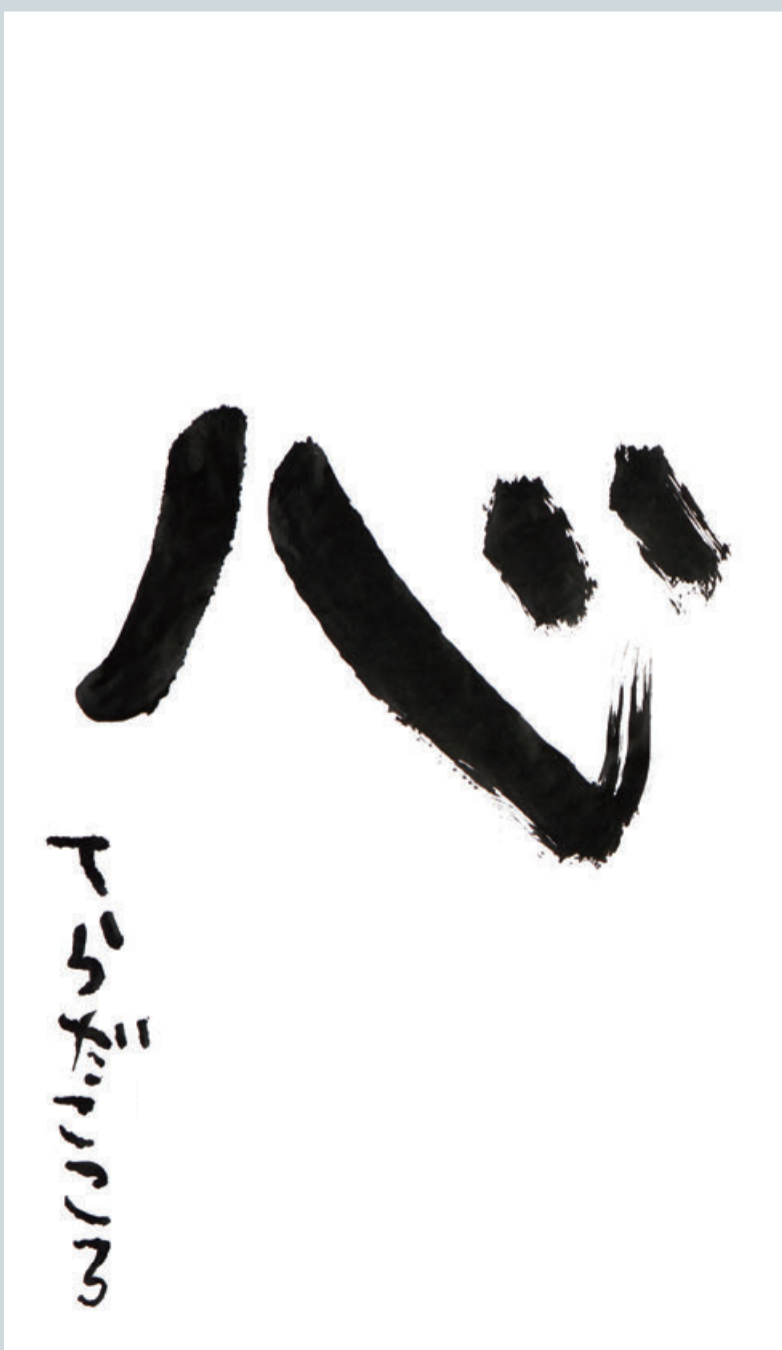
おもち2コ。ちくわ・あげ玉・のり・ねぎが入った、カウうどん。創業当時と変わらないそう。1本で、お腹いっぱいになった。

アイスコーヒー

「おはようございます、よろしくお願ひします！」大きな声でご挨拶。寺田くんが仕事で大事にしているのは、挨拶ともう一つ、「自分はこの役の子になる、がんばるぞ、よいこう！」という気持ち。

はじめての書道では、名前の「心」に挑戦。慣れない筆に、心もとな線だったのが、すぐに芯のある字が書けるようになった。寺田の「田」と「心」で「思」になる。思いやりのある子という願ひの通り、思いやりのある、がんばりやさんだ。

「台本を何回も読んで覚える。覚えて、その役になりきってがんばっています」。お芝居は難しいことばかりだけど、大好きだという心くん。ドラマのことを尋ねると、ストーリーの中での自分の役の役割や他の共演者のことなど一生懸命説明してくれた。お仕事でいろいろな人に会えたり、お芝居を教えられるのが楽しくてたまらないようだ。でも実は、一番楽しかったのは、お仕事で動物園に行けたこと。学校は、「お勉強することも楽しいけど、給食を食べることが一番好き」と素直な言葉。「いつもニコニコいられるのは、楽しいから」。そんな心くんが、みんなを笑顔にする。



PROFILE 2008年6月10日生まれ。2010年事務所に入り、TOTOのCMで話題。その後ドラマ・映画やCMで活躍。演技への評価も高く、「2015 55th ACC CM FESTIVAL・クラフト賞 フィルム部門」演技賞を受賞。

ひとこと  
ください  
第三回  
寺田心  
Photo / Ko Hosokawa



Photo / Kota Sugawara

## 音楽をとことん追求 同世代にも届けたい

**井上 銘**(ジャズギタリスト)  
Inoue May

PROFILE 1991年、神奈川県生まれ。幼少期からピアノ、ドラムなどに親しみ、15歳でギターを始める。高校在学中に鈴木勲氏のグループに参加し、プロのギタリストとして活動をスタート。2011年、メジャーデビューアルバム、2013年セカンドアルバムをリリース。アメリカ留学を経て、日本を拠点にソロやバンドで精力的にライブ活動を行っている。  
<http://ameblo.jp/may-inoue/>

高校でジャズに出会って、それぞれの時代の最高のミュージシャンを一気に辿った。1950年代まで、ある意味並列で聴いてきた。その上で追求するのは、ジャズの最も自由な表現。「時代に囚われないのが僕ら世代の特徴。『井上銘と言えばこの音だ』となるような、そこに人生をかけていきたい」。

プロデビュー後、奨学生としてパークリーに留学。NYのライブハウスで刺激

を受けた。「日本人が居酒屋に行く感覚でライブに来るお客さんがいて、トッププレイヤーが攻める演奏をしている。音楽家が育つ街だと感じた」。日本は50代以上のお客さんが多く、若い世代の関心は多様化している。「同世代の人たちに、ミュージシャンが真心を込めてつくった作品を聴いてほしい」。ソロやバンド活動を重ね、今まさに成長期。リアルに響く音楽を模索し続けている。

最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは1月から4月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



第8回恵比寿映像祭「動いている庭」  
2016年2月11日(木・祝)～20日(土)  
恵比寿ガーデンプレイス内各所ほか  
デザイン:  
飯島広昭・右田佳之(株)北山創造研究所・ドゥービーカンパニー(株)

演奏会や舞台ではなく、映像の国際フェスティバルのフライヤーですが、まずこの文字の不思議さに惹かれました。切り抜いた文字に何か処理をしていると思うけど、現代社会を日々変容する庭としてとらえたこの映像祭にふさわしい表現になっていると思う。実演とはまた違った楽しみがありますよ。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



北九州芸術劇場プロデュース「彼の地」  
2016年2月2日(火)～7日(日) / 北九州芸術劇場(福岡)  
2016年2月12日(金)～14日(日) / あうるすぽっと(東京)  
作・演出: 桑原裕子(KAKUTA)  
デザイン: トミタユキコ(ecADHOC) 写真: 重松美佐

演出家が北九州に滞在し、オーディションも北九州で実施したほど、「北九州」を感じさせる舞台。その臨場感がすごく出ているフライヤー。写真の魅力はもちろん、三分割した画面構成と「彼の地」のタイトル文字が好きです。裏面のキャストの見せ方が、これまた魅力的。WEBでチェックしてみてください。



中学1年生から高校3年生まで50人近い部員数を誇る海城中高古典芸能部。落語を中心に、漫才・コント、色物など多彩なジャンルを扱う、ほかには類を見ない部活だ。

自分で演じるのはもちろん、ネタを考えるのが専門の部員や、古典芸能に関する研究をメインに活動している部員もいる。小学生の頃から桂枝雀師匠の「地獄八景亡者戯」を暗唱できるほど繰り返し聞いていた猛者もいれば、落語には全く興味がなかったという人も。

学園祭での寄席のほか、地域の交流センターや学童保育からの依頼で、出張公演を行うこともある。小学生の前で

演じるのは、反応がよくて楽しかったそう。

部長の藤田くん(高1)は、古典芸能部は自分にとって「おばあちゃんちみたいな場所」だと言う。落語の本やCD、高座のときに使う座布団や屏風、出演者の名前を書く「めくり」で埋め尽くされた四畳半の部室は、「自分の部屋より居心地がいい」と渡辺くん(高1)。

顧問の川崎真澄先生は、基本的に生徒の活動に口出しはしない。何のネタをやるか相談に乗ったり、たまに見せてもらったりする程度だという。「でも、実はすごい。落語好きだし、めちゃくちゃ詳しい」と部員たちは口を揃える。

それでもダメ出しをしたりしないのは、まずは楽しさを知ってほしいという思いから。「正しくやるよりも、そのネタのどんなところが面白いのかを自分で感じてほしい」という。8年前、当時の生徒から落語研究会を立ち上げたいという相談を受けたとき、部活の名前を「古典芸能部」としたのも、間口を広くしたいという思いからだった。

みんなから「裏の部長」と慕われる滝口くん(高1)いわく、「来る者拒まず、去る者ちょっと追う」。気負わず自由な雰囲気なかで古典芸能とたわむれる彼ら。中学生の頃からこんな経験ができるなんて、ちょっとうらやましい。



エッセイ

## ピーター・バラカン 「いつの時代も、音楽はラジオから」

Illustration / Asuka Kitahara

音楽を聴くには、ラジオやCD、ストリーミング、いろんな方法があります。この40年を振り返っても、聴く人を増やすには、メディアの役割が大きいと思います。70年代はFM誌の黄金時代。FM誌に曲名が全部出ているから、<sup>ただ</sup>無料で聴いて、好きなものを買う。ラジオの電波が自由になった80年代後半からは、J-WAVEができて、J-POPが人気に。洋楽を聴く機会が減ってきました。

今、若い世代で洋楽を知らない人が多いのは、媒体がないから。ネット社会となった現代では、インターネットラジオで手軽に聴けるのが一番だと思います。そんな機会をつくりたいけど、日本の法制度では配信のハードルが高く、小さな番組ではスポンサーもつきません。このままだと洋楽文化は衰退する一方で、もどかしく感じています。

イギリスでは、DJのジャイルズ・ピーターソンが、インターネットラジオでミュージシャンをどんどん紹介していて、著作権団体もそれをサポートしています。音楽を聴く機会が増えると、CDを買っ

たりストリーミングで聴くことにつながるので、業界も柔軟に対応しています。

リスナーを増やすために、ラジオの果たす役割は大きい！本当にいい音楽が流れていれば聴きたい人は多いはず。過去に担当した番組でもそう実感しました。ただ、ラジオ局の現状としては、広告収入の限界から番組の構成も左右されます。音楽業界では、すごく売れているものが少しあって、ほとんど売れていないマニアックなものがたくさんあって、中間のそこそこいいものの層があります。この中間が多ければ多いほど業界は健全だけど、いまやどんどん減っています。

テレビ局がかつて使っていた電波帯が使えるようになると発表がありました。小規模のラジオ局が1つできれば面白いと思います。いい音楽を発信したい人、聴きたい人はたくさんいます。もしお声がかかれば、すぐにでも協力したいです。

1951年、イギリス・ロンドン出身。音楽評論家、ラジオDJ。ロンドン大学日本語学科卒業後、74年に音楽出版社の著作権業務に就くため来日。80年にYMOのマネジメント事務所へ転職。その後、独立。2012-2014年、インターFM執行役員。『ラジオのこちら側』(2013)など著書多数。

### NEWS

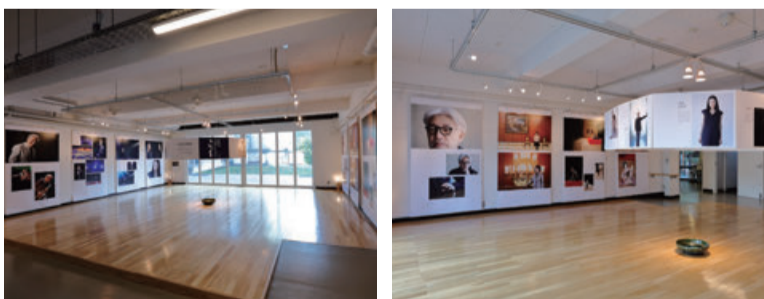
松本茂章 著  
『日本の文化施設を歩く：  
官民協働のまちづくり』3,200円+税

日本各地の個性豊かな文化施設80事例を、まちづくりの視点もふまえて丁寧に取材した1冊。芸術を育む施設として、SANZUIの撮影でも利用している「芸花伝舎」も取り上げられています。(水曜社/2015年)



### 『SANZUI写真展』の一コマ

10/23~11/19、芸花伝舎ギャラリーでSANZUI写真展を開催しました。1号から8号までのロングインタビューの迫力ある写真に囲まれ、凛とした空間となりました。会期中は、チラシを手に遠方からいらした方や、近隣の方、稽古で訪れた方、子どもから大人まで、日々たくさんの方が美しい写真に見入っていました。アンケートでは、「その人の人柄をよく表しているステキな写真でした」「いつも写真が他では見られないような独特の感じがしてすばらしいと思っていました。大きなパネルで観られてよかったです！」など感想をいただきました。ご来場ありがとうございました。



### 『SANZUIファンミーティング』開催！

SANZUI編集部では、20~30代の人たちにもっとSANZUIを手にとってもらいたいと思っています。どんな人や舞台に興味をひかれるか、何に関心があるか、ぜひお話をきかせてください。あなたの一言で今後の誌面がガラリと変わるかも?!20~30代の編集部メンバーと少人数でのミーティング。参加者には、SANZUIオリジナルグッズをプレゼント。1/28(木)19時より西新宿にて開催。参加希望の方は、お名前、年齢、ご所属(学校、仕事など)を明記の上、scontact@cpra.jpまでお申込みください。応募者多数の際は、調整させていただきます。【締切:1/18(月)】

### PRESENT

A



### 『春風亭昇太 独演会』各1名様

爆笑間違いなし!各地での独演会を各1名様に。  
3/21(月祝)13時半開演 広島県民文化センター、  
3/23(水)19時開演 仙台市民会館、3/25(金)19時  
開演 かもめリリオホール。

B



### 『野坂操壽リサイタル』2名様

「美匠熟考」でご紹介した二十五絃箏制作25周年記念の演奏会。繊細かつ力強いお箏の調べをご堪能ください。浜離宮朝日ホール(築地)で3/24(木)19時開演。

【プレゼント応募方法】SANZUIウェブサイト(<http://www.cpra.jp/sanzui>)からご応募いただくか、はがきに①ご希望のプレゼント②氏名③年齢④性別⑤住所⑥電話番号またはメールアドレス⑦SANZUI入手場所⑧誌面の感想を書いて「〒163-1466 新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー11階 芸団協広報課」までお送りください。【締切】3/4(金)

\*当選の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



### 編集後記

新年第一号ということで、「笑い」をテーマにお送りした今回の特集。表紙も「HaHaHa」と笑い声で埋めつくされて賑やかです。飾り表紙の模様も、「ハハハ」と「www」を図案化したもの。お気づきになりましたか?

撮影ではみなさん多彩な表情・ポーズを次々繰り出して下さいました。全ての写真をお見せできないのが残念ですが、選りすぐりの1枚を掲載しています。黄色い背景に楽しい表情が並んで、福を呼び込めそうな誌面になりました。

SANZUIも4年目。どうすれば実演芸術の楽しさが伝わるか、試行錯誤しながら作ってきました。アンケートの感想も毎号うれしく拝読しておりますが、ぜひ生の声を伺いたい!ということで、1月には初のファンミーティングを開催します。「もっとこうすればいいのに」「あんなことが知りたい」「こんな人の話が聞きたい」などなど、ざっくばらんに聞かせてください。インタビューや撮影の裏話もお話できるかも……? 未来の実演芸術を支える世代のみなさんご応募を、編集スタッフ一同ときどきしながらお待ちしております。(小)

WEBサイト: <http://www.cpra.jp/sanzui>  
Facebook: <https://www.facebook.com/sanzui.news>  
Twitter: @SANZUI\_info

発行:公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会  
実演家著作権隣接センター(芸団協CPRA)  
発行日:2016年1月1日  
発行人・編集人:松武秀樹(芸団協常務理事・芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)  
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)  
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUI編集プロジェクトチーム  
上野博(音制達)、丸山ひでみ(PRE)、鈴木明文(音事協)、井上滋、君塚陽介、大井優子、小泉美樹(芸団協CPRA)  
アートディレクター:新村則人  
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)  
コピーライター:二藤正和  
協力:芸花伝舎、水口食堂、flick studio

### 芸団協・実演家著作権隣接センター(CPRA)とは

CPRAは実演家の権利処理業務を適正に行うための専門機関として、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)と関係団体の協力により1993年に発足しました。レコードやCDを放送で使ったり、レンタルしたりするとき等の権利処理と使用料等の徴収を行い、委任権利者に分配しています。それに留まらず、広く実演芸術の円滑な流通と権利の擁護を目的として幅広い活動を展開しています。<http://www.cpra.jp>





# 室井 滋

Muroi Shigeru

Text / Tatsuke Shimazaki Photo / Ko Hosokawa Hair/Makeup / Masao Suzuki(MARVEE)

今が人生で一番幸せな時間。  
肩の力を抜いて、もっと豊かな俳優人生へ歩みたい

映画、テレビ、CM。どんな場所でも独自の存在感を放つ女優・室井滋。80年代には「自主映画の女王」として名を馳せた彼女は、現在も日本を代表する稀代のコメディエンスとして第一線で活躍し続けている。普段、私たちが室井さんを目にするのは映像メディアを通じてが大半だが、その一方でオリジナルの朗読ショーを企画し、全国のホールや公民館を飛び回っている。そのパワーの原動力はいったいなんだろうか。富山県で過ごした青春期の思い出、演劇に目覚めた原点、現在の活動まで、幅広い話を伺った。

もう全然そういうのがなくなっちゃった。女優の皆さんはオシャレな方ばかりなので、逆行するのめいかなものかと思ってるんですけどね。でも、自分に似合うもの、似合わないものはハッキリわかります。

今日の撮影のように、室井さんにはいろんなオフアワーが寄せられますよね。多様な役柄を、どのように演じ分けられていますか？

例えば衣装のことで言うと、私って衣装に着られちゃうタイプなんです。だから衣装合わせはとて大切で、最初の飛び込み方を間違えちゃうと方向修正が難しい。最初の設定を明確にして、そこさえきちんと納得できれば、イメージを膨らませてその世界に入っていく。普段はオシャレではないんだけど、演じる上での服装や髪型は大切だと思ってます。

## お芝居の世界に飛び込むための秘訣とは？

——(巻頭用の)写真撮影おつかれさまでした。

面白かったです。最初「パラパラ漫画を作りましたよ」と言われて驚いたんですよ。一体どうなるんだろうって。でも、以前金沢21世紀美術館に行ったときにカワイイ猫が動くパラパラ漫画の豆本を買ったのを思い出して「じゃあ、こんな風にしよう」と閃きました。

——衣装も、室井さんご自身が持ち込まれたものもありましたね。室井さんのアイデアも反映したオシャレな仕上がりになったと思います。

すごい大荷物で今日は来ちゃいましたね。でも私、実際はすごいドンクサイ人間で、着飾ることがたぶん一番苦手。若い頃はもう少しオシャレに気をつかっていたんですけど、歳をとって、

の自分にとって難しい環境でした。それで夜に町を出歩くような子になったんです。でも、出身の富山県って保守的な土地柄だし、本格的にグレルほどの度胸もなかったから、お芝居や映画を見て夜を過ごす生活がかなり長く続きました。

——劇場が、多感な時期の避難場所になっただけですね。

高校に入ってもその生活は続いていて、先生や友だちも私が演劇をよく見ているのを知っていたんですよ。それで、ある年の3年生を送る会で「室井、お芝居の演出をしてみないか？」って言ってくれたんです。演劇部に入部しているわけでもなかったから最初は驚いたんですけど、実際に自作自演でやってみるとすごく面白かった。演劇部の先生も「室井さんは女優の才能がある！」なんて言ってくれました。

——それが転機になったんですね。

そうなんです。私、単純なので「じゃあ女優になっちゃおうかな？」みたいな。それで上京して早稲田大学に進学して、入学式の日からさっそく演劇サークルを探して。そのうちにシネマ研究会にも入って。

——80年代に「自主映画の女王」と言え、室井さんのことでした。

当時はびあフィルムフェスティバルの全盛期で、みんな8mmカメラで自主映画を作っていましたね。知り合いばかりだったから私が出演する機会も本当に多くて、審査員の方から「どの作品にも出演してるねー」なんて言われました。東京に出るからは、そのくら



からお芝居三昧の日々だったんです。アルバイトも単発のものを1000個くら

いやって、体力の限界まで働いて、稽古して、っていう毎日でしたけど、思

春期の生活環境と比べれば本当にバラダイスでした。大学在学中に父が亡くなるんですが、それまで仕送りもしてくれていましたから、好きなことに打ち込むことができました。

——自主映画や小劇場の役者というところが、室井さんはむしろその生活を謳歌していたんですね。

「好きなことしかしてないんだから、とんでもない」くらいに思っていました。だからプロの役者という意識を持つようになったのも、だいたいぶ経つてから。今の事務所(ホットロード)に入っ

てからなんです。

『やっぱり猫が好き』創作秘話  
共同作業が好きな理由

——ホットロードに入ったのは「やっぱり猫が好き」の途中でしょうか？  
そうですね。

——やはり室井さんというと『猫が好き』の恩田三姉妹のイメージが鮮烈です。

あの作品に出演することになったのはちょっとした偶然。さとちゃん(小林聡美)ともたいさん(もたいまさこ)の事務所の社長さんが企画した番組で、2人とも知り合いだったから1回目の放送をテレビで見たいんです。その時は普通のドラマ形式でして……。でも、

諸事情でそれ1話で終わっちゃったんです。さらに私の所に連絡がきて、「しげちゃん、やってみない？」て。

——そうなんですか！  
キャストが変わったので、内容も見直しになりました。でも何せ時間がなくて、力技、アドリブの連続で2話目を完成させたんですよ。ただ、私としては話し合っって作って行くやり方は、

自主映画的であり、テレビの現場でそれをやらせてもらえるのはスコブル樂しかった。おまけにそれが妙な好評を得て、三姉妹の生活を描く『猫が好き』のスタイルになったんです。

——なるほど。  
演出家やカメラマンも積極的に面白がってくれて、舞台中継みたいな雰囲気を生かしてくださいました。自主映

画の現場に近い、大勢の人たちの共同作業のなかから『猫が好き』は生まれたんです。そのワイワイ感が一番の魅力だと思っています。

——今日の撮影でも、室井さんから積極的にアイデアを出される場面がありました。単に演じるだけではなく、作品作りに関わりたいという気持ちが強くあるんですね。

全員で何かを作る環境が好きですね。2014年に『マザーズ』という名古屋の中京TVが製作したドラマに出演したんですが、全国のドラマと違って予算規模も少ないし、手作り感に溢れた現場だったんですよ。お弁当も本当に素朴で、正直「キツいな」と思うこともありましたけど、その分、チームの団結は強かったです。監督の谷口

正晃さんも映画『のど自慢』の助監督をしていた頃からの知り合いで、お互いに意見を交わし合える関係でしたから、楽しかったですね。

——『マザーズ』は特別養子縁組をテーマにしたドラマですね。日本民間放送連盟賞のテレビドラマ番組最優秀賞、文化庁芸術祭のテレビ・ドラマ部門優秀賞を受賞しました。

愛着を持って関わった作品が、そうやって評価されるのは嬉しいですよ。今、その続編を作っているところなので楽しみにしててください。

絵本ライブで再発見した、クリエーションの喜び

——室井さんはエッセイストとしても知られていますが、最近は絵本作家としても活動されています。その作品をもとに「しげちゃん一座絵本ライブ」も全国で上演を重ねています。そこにも、物作りに関わっていたという意志を感じます。

東京育ちで美人に生まれていたら、もっと女優らしい生き方をしていたのかもしれないですけど、すべて自己流でここまで生きてきましたから、やりたいことは全部とりあえずやりたいんだと思います。この年齢になるとさすがに落ちてきてきたけれど、若い頃はエネルギーを持って余っちゃってましたから。突然、小型船舶の一級免許を取ったり、毎日狂ったようにお酒を呑んでいた時期もあった。いちばん忙しい時期に連載の原稿も何本も抱えて「室井さんは、いったい何人いるんですか？」って言われるくらいでした。

——パワフルですよ。

もちろんお芝居も一生懸命やっていますよ。でもそれだけじゃ足りないような気持ちどこかにあって、それが海や原稿に私を向かわせたのだと思います。でも、富山県人なので基本はマジメなんです。遅刻しない。病

けることが申し訳なくて、自然と自己管理能力が身に付いていた。でも正直言うと、そういうマジメな自分があまり好きでない。朗読ショーに打ち込むのも、自分なりにバランスをとったり、逆に崩したりしたい願望の現れなのかもしれません。

——朗読ショーを続けてみて、いかがですか？  
メンバーの中で自分が座長なので、プランニングできるのが楽しいですね。突飛な提案で驚かせたり(笑)。1年で30ステージくらいあるんですけど、スタイリストさんと一緒にコスチュームを作ったり、オリジナルの音楽も作ったり、やっぱりとても楽しいです。会場の規模も300人くらいで満員になる小さな町の公民館から、1700人くらい入る大きなホールまで幅広く、その変化も楽しい。客層も、子どもからお年寄りまで来てくれて、むしろ大人の方が多いくらい。全体の1割から2割が子どもで、大人ばかり、家族そろっての公演もよくあります。終演後もサイン会に長蛇の列を作ってくださいって、直接感想を伝えてくださるのも嬉しい。

——いい距離感のイベントですね。  
若い頃は、自分ができないことがたくさんあるのに悩みがちだったんですよ。でも、絵本ライブみたいに好きなことを楽しみつづ、同時に「できないこと」を抵抗なく受け入れられるようになって、すごく楽な気持ちになりました。そうするとお芝居にも気が負いなくなつて、すつと映画やドラマの世界に入っていくことができる。もしかしら、人生の中で今が一番充実した時間かも思っています。

PROFILE 女優。富山県生まれ。81年早稲田大学在学中に映画『風の歌を聴け』でデビュー。映画『居酒屋ゆうれい』『のど自慢』などで映画賞を多数受賞。12年に日本喜劇人協会喜劇人大賞特別賞、15年に松尾芸能賞優秀賞受賞。著書も多く、絵本作品に『しげちゃん』『金の星社』『ウリオ』『きらきら』は、共に世界文化社『チンドンボンさん』(絵本館)。各地で絵本ライブを開催中。ブルースの新鋭W.C.カラスとミニアルバム『信じ

るものなどありやしない』を発売。

【バラバラ漫画の作り方】裏表紙、P24~26を点線にそって切り、番号順に重ねて、上部をクリップでとめてください。先をそろえるときれいに動きます。



1



ロングインタビュー  
室井 滋

2



3



4



5



6



7



8



9



10

